

広報 **きたもと**

2月
2017 No.948

特集面

きっと、もっと、きたもとが好きになる 旬な話題をお届け!



北本の歴史を探る ③

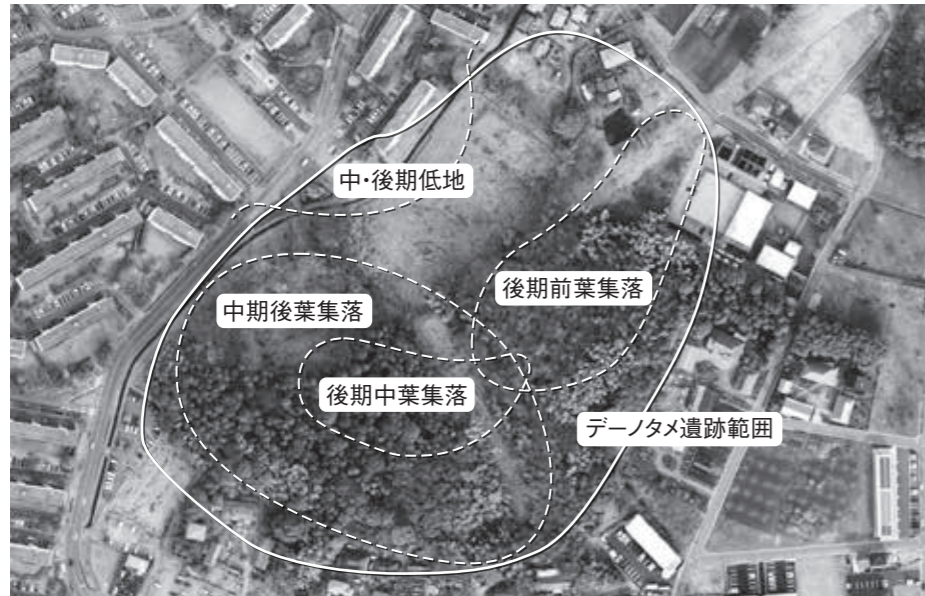
デーノタメ遺跡が拓く 縄文の世界

第1次調査の風景

- 関東最大級の縄文のムラ
- 縄文のタイムカプセル
- 縄文の農耕はあったか?
- 泉と森が守った遺跡



炉に据えられた深鉢形土器(縄文時代中期)



デーノタメ遺跡と集落の位置

左の写真はデーノタメ遺跡を空から見たものです。今からおよそ5000年前、写真の左側に縄文時代中期の集落が広がり始めます。

その後、およそ4000年前には右側に縄文時代後期前葉の集落が広がり、さらに後期中葉の集落が再び左側に戻ってくるように展開していくのです。



約5000年前の住居跡



炉に据えられた土器



住居跡出土の縄文土器



第1次調査8号住居跡

デーノタメ遺跡が拓く 縄文の世界

北本の歴史を探る ③

関東最大級の縄文のムラ

南小学校の交差点を曲がり、北本団地の外周道路を進むと、左手に豊かな雑木林が広がっています。この一帯がデーノタメ遺跡という縄文時代の約6haの大集落です。この遺跡では約12000年の長い間、縄文人の暮らしが営まれていました。

デーノタメ遺跡は、下石戸下地区に所在しています。地理的には江川という小河川の支流に面していて、その規模は370m×230mと大変広い遺跡です。遺跡名のデーノタメとは、昭和40年代の半ばまで、この地にあつた約1000mの湧水池の名です。こんなと湧き出す泉は、縄文時代から生活の糧となる水源であったことでしょう。

12000年続いた集落

この遺跡では、平成12年から

曲線状に連なっていて、その長さも270mと破格の規模でした。このため、デーノタメ遺跡の特徴は、集落がとても大きいこと、さらにその集落が約12000年の長い間、連続と継続していたことなのです。

台地のムラを掘る

縄文時代中期の遺跡を調査すると、いくつもの住居跡が集中しています。これまでに確認された住居跡の数は39軒で、中期のムラ全体では200軒以上であると想定されます。

これらの住居は竪穴式住居といわれるもので、地面を楕円形に掘りくぼめ、柱を立てて組み、屋根を架けた構造です。住居の中央には、床を掘りくぼめた炉跡が設けられます。縄文人が炊きをした跡で、中には熱効率を高めるために土器を据えているものがあります。

住居跡の中からは、土器や石器が多く出土します。土器の多くは住居が使われなくなった後に廃棄されたもので、住居跡は、集落の捨場としての役割も果たしていました。

20年の間に4回の発掘調査を行い、平成28年に2回の補充調査を行いました。その結果、遺跡の西側には縄文時代中期(今から約5000年前)の集落が、東側には縄文時代後期(今から約4000年前)の集落が広がっていることが明らかになっています。このうち、中期の集落は「環状集落」というドーナツ形の形態で、210mを超える大きさは「関東最大級」といえる規模です。さらに、遺跡の東側に広がる後期の集落は、低地を囲むように



浅鉢形土器の展開写真(勝坂式土器)

芸術的な縄文土器

縄文土器の文様は縄目だけではありません。特に縄文中期の勝坂式土器の複雑な文様は、芸術的なセンスを感じさせるものです。クモやカエルを抽象化したような文様は、「物語性文様」といわれ、縄文人の神話を投影したものという説があります。



2号クルミ塚

直径40cmでクルミの殻が多く廃棄されていますが、土器や漆の木器片も含まれています。



トチノキの種子

トチノキは縄文時代後期から積極的に利用されるようになっていきます。



1号木組遺構

トチノキの果皮が多く出土し、トチノキのアクを抜いた施設と考えられます。



ウルシ

漆塗土器には、黒漆が下地として塗られたあと、ベングラで色付けされた赤漆で文様を描いています。

漆



ヒスイ製大珠



クルミ形土製品

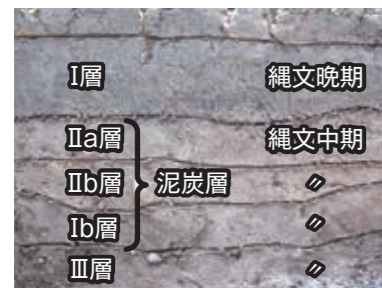


土製耳飾

コラム Column

泥炭層ってなに？

泥炭層は長期間、空気から遮断され、水漬けのまま遺跡をパックしています。このため、有機質の遺物がそのままの姿で残るのです。デーノタメ遺跡で、漆や植物の種や実が奇跡的に残ったのは、この泥炭層のおかげなのです。



調査区の泥炭層

捨て場であるように、クルミ塚はクルミを主体とする廃棄の場です。大きさは直径40cmほどで、皿状やバケツ状に掘り込むもの、中には5m×2m、厚さが40cmと大きなものもありました。クルミ塚では縄文人が割ったクルミの殻(核)が目立ちますが、この他に土器や木製品、小さな種や実が含まれています。種や実を調べてみると、ヒシやエゴマのほか、多肉のベリー類が多く、いずれも縄文人が利用できるものばかりです。

また、クルミ塚やその周辺では、珍しいクルミ形土製品のほか、美しいヒスイ製の「大珠」や土製の耳飾なども出土しています。これらは、装飾品であるとともに儀礼に用いる道具です。

このため、クルミ塚は単なる生活のゴミ捨て場ではなく、豊かな恵みを願う神聖な儀礼の場であったのかもしれない。

調査区の南部には、4000年前の縄文後期の泥炭層が残っていました。このエリアでは小さな溝跡や土坑等が見つかっていますが、後期の泥炭層では、トチノキの皮が層をなすトチ塚も見つかっています。

溝跡には、木材を敷いた木組遺構も造られていて、トチノキの実のアクを抜く、水さらしの施設と考えられています。台地に住む縄文人が、水辺でトチノキの皮を剥き、アク抜きをする様子が見えそうです。

低地の水辺を掘る

平成20年度に実施した第4次調査は、デーノタメの湧水が流れ出した流路が対象で、面積は約170㎡です。この調査地点は、住居跡が分布する台地の上から、斜面を4mほど下った低湿地面に位置しています。

低湿地では粘土層が基盤となり、すぐに水が湧き出すような環境です。このため、調査にあたっては、半年の間、ポンプで水を汲み上げながら調査を進めていきました。

赤と黒の土器

調査では、まず調査区の全面を覆う黒褐色層(I層)を掘り下げていきました。このI層を剥ぐと、次に縄文時代中期の泥炭層(IIa層)が現れ、この層では次々と多くの縄文土器が顔を出したのです。

土器を敷き詰めたような出土状況は、まるでぬかるむ泥炭層の足場を固めているかのようです。

縄文のタイムカプセル

す。驚いたのは、土器の中に色鮮やかな赤や黒の漆を塗った多くの土器が含まれていたことです。漆を塗った土器は、全て口が広く、高さの低い浅鉢という器形でした。

英語では、漆のことを小文字の「Japan」と書きますが、漆の利用はまさに日本の基層文化なのです。今こそ漆工芸は、限られた地域の伝統工芸というイメージがありますが、5000年前の足元の遺跡に、漆工芸の技術が伝わっていたことは驚きです。ともあれ、色鮮やかな漆製品の発見は、縄文時代の色彩のイメージを大きく変えるものになったのです。

貝塚ならぬクルミ塚

泥炭層を掘り進めると、土器とともにクルミの殻が目立ちます。その中にはクルミの殻が集中する「クルミ塚」という遺構があり、合計で6か所が確認されました。

クルミからトチノキへ

このため、クルミ塚は単なる生活のゴミ捨て場ではなく、豊かな恵みを願う神聖な儀礼の場であったのかもしれない。

縄文の農耕はあったか？

花粉分析は語る

低湿地遺跡には、様々な情報が詰まっているため、花粉・樹種・種実・昆虫・年代・漆など、様々な分析を行っています。



ツルマメ
のマメは、ダイズとアズキの2種です。ダイズの野生種はツルマメ、アズキの野生種はヤブツルアズキ

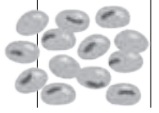
で、ともに荒川の河川敷で観察することができます。

このうち、花粉分析の結果によると、当初、湿地ではハンノキ林が広がっていましたが、縄文人が生活を始めるとクルミ林に入れ替わっていきます。また、台地上ではクリを中心にアカガシ・トチノキの仲間が増加し、ウルシノキも栽培されていたこともわかってきました。

縄文人たちは、集落の林を積極的に管理し、生活に役立つ林へとつくり替えていったのです。

縄文人のマメ栽培

縄文人は食料や木材として植物を有効に利用していましたが、最新の研究では、縄文人のマメ栽培に注目が集められています。現代の私たちは、10数種類のマメを食べていますが、日本原産



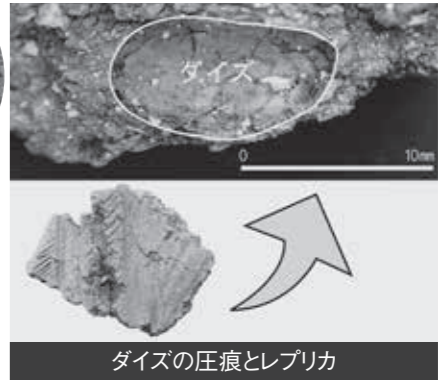
のママメ遺跡ではクルミ塚から炭化したアズキが出土していて、このほか、5000年前の勝坂式土器には、アズキとダイズの圧痕がそれぞれ確認されています。しかも、ダイズの長さは1cmを超え、大型化していることが確実です。つまりデーノタメ遺跡では、すでにダイズを栽培していた可能性が高いのです。

関東の三内丸山遺跡

また、デーノタメ遺跡の泥炭層を洗い流すと、中には様々な種や実が含まれています。縄文人の食の実態に迫るデータとなりますが、その豊富さは、あの「三内丸山遺跡」にも匹敵するといわれるほどののです。



ヤマグリ



ダイズの圧痕とレプリカ



土器に残るアズキの圧痕

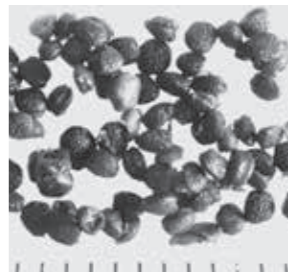


炭化アズキ

コラム Column

縄文人の酒造り？

後期の溝跡では、多量のニワトコやコウゾ・ヤマブドウ・サルナシなどのベリー類が含まれていました。特にニワトコやコウゾの2種は、300ccの土壤に1,500粒を超える数が含まれていて、これらは酒をしばった粕という説があります。もしかしたら、デーノタメの縄文人は、美味しい果実酒を作っていたのかもしれない。



土壤中の科ウゾの核



土壤中のニワトコの核

泉と森が守った遺跡

デーノタメ遺跡のすごさ

デーノタメ遺跡の特色をまとめると、次の4つです。

ポイント① 大規模

遺跡内の縄文時代中期と後期の集落は、とても大規模で、遺跡の残りがとても良いこと。

ポイント② 長期間

縄文時代中期から後期にかけて(約5000年前〜3800年前)、約1200年もの長い間、集落が継続していること。

ポイント③ 漆製品

縄文時代中期の低湿地遺跡が全国でも少ない中、漆塗土器をはじめとする漆製品が多いこと。

ポイント④ 植物遺体

クルミやトチノキに加え、縄文人の食の実態に迫る種や実などの植物遺体が豊富なこと。

大環状集落の密集地帯

また、デーノタメ遺跡の位置する江川流域に目を広げてみると、実はデーノタメ遺跡から1km南西には諏訪野遺跡が、2km南には高井遺跡という縄文時代中期の環状集落が位置しています。これらはいずれも200mを超える「大環状集落」で、デーノタメ遺跡と同時期に存在していました。

これほど至近に大集落が3つも集中するのは、全国でもほとんど事例がありません。当時の江川流域がそれだけ豊かな環境であったことを物語っています。

縄文の原風景

今、デーノタメ遺跡は、豊かな森に囲まれています。この風景は、まさに縄文時代の歴史的な景観を彷彿とさせるものです。デーノタメ遺跡は、太古の昔から、森と泉が守ってきた奇跡の遺跡といえるのです。

開催します！



デーノタメ遺跡が拓く縄文の世界I

日時 2月25日(土) 13:00~17:30 場所 文化センター

- ①「デーノタメ遺跡の発掘調査について」
阿部芳郎 (明治大学教授)
齊藤成元 (北本市教育委員会)
- ②「漆が語る縄文時代の工芸技術」
宮越哲雄 (明治大学名誉教授)
- ③「植物の栽培管理からみたデーノタメ遺跡」
能城修一 (森林総合研究所)
- ④「デーノタメ遺跡の保存と活用のイメージ」
秋山邦雄 (歴史環境計画研究所)

●パネルディスカッション(各発表者)

申込み不要

入場無料

漆塗工芸を
実演します！
小林恵美
(漆工房Share)
12:00 ホワイエ

同時開催「デーノタメ遺跡出土品展」2月24日(金)~26日(日) 文化センターホワイエ

文化財保護課文化財保護担当 ☎594-5566

※都合により内容を変更することがあります。